

コーヒーの下部食道括約筋圧への抑制的効果

Inhibitory Effect of Coffee on Lower Esophageal Sphincter Pressure: F.B. Thomas, J.T. Steinbaugh, J.J. Fromkes, H.S. Mekhjian, J.H. Caldwell (Gastroenterology 79: 1262~1266, 1980)

医師は胸やけの患者にしばしばコーヒーを禁止してきた。カフェイン含有飲料は、この種の患者に有害であるとの信念に基づいている。しかしながら、Cohen と Booth は、下部食道括約筋圧は、純粋のコーヒーや脱カフェインコーヒーに対して上昇を示し、コーヒーの何か他の性質または成分が、胸やけを起こしたり、それを悪化させるのだろうと述べ、この症状は括約筋圧の下降と関係がないと結論した。著者らは、正常者と逆流性食道炎患者でコーヒー

の括約筋圧への影響を調べ、Cohenらの結果と異なり、圧の低下を来すことを報告している。

研究対象は、正常人 20 人、逆流性食道炎患者 16 人で、pH 4.5 と 7.0 のカフェイン入りコーヒー 150 ml を飲ませて、下部食道括約筋圧を調べた。その結果、コーヒーの pH 4.5 と 7.0 の両方で、正常人および食道炎患者の空腹時および食後での括約筋圧を下げる事がわかった。効果の振幅と持続時間は、pH 4.5 のコーヒー摂取後でより著明であった。以上のデータは、コーヒーが括約筋圧を下げるにより胸やけを起こしたり、悪化させるとのいわゆる臨床的信仰を支持する所見である。しかし著者らは、胸やけは必ずしも括約筋圧の変化に関連するものではなく、コーヒーの食道粘膜への直接刺激効果によるかもしれないと述べている。括約筋圧の最大低下

は、コーヒー摂取後 45~60 分で起こった。このことは、コーヒーの括約筋圧への影響は、局所の反射機転によるものではなく、むしろ全身のあるいは内分泌的メカニズムを介して起こることを示唆している。コーヒーが括約筋圧を下げる消化管ホルモンの分泌を刺激するか否かは定かでないが、コーヒー中に含まれるタンニン酸、醋酸、ニコチン酸、蔞酸などのうち 1 つかあるいは幾つかのものが括約筋圧を下げるのではない。どれによるかはわからない。以上より、胃内容の食道への逆流や胸やけが、括約筋圧の低下と完全に一致しないけれど、コーヒーが胸やけを起こしたり、悪化させるという臨床的観察を支持する若干の客観的証拠を呈示していると思われる。

(愛知県がんセンター第 1 内科

小林世美 抄)

Coffee Break

Sorbin

Vagne らが、十二指腸吸収に及ぼす Gastrozymin の影響について研究中に、Gastrozymin を Sephadex G-25 で濾過直後のフラクションが、十二指腸における水とナトリウムの吸収を著明に増加させる作用を有することに気づいた。このフラクションと同じものの purification を行ってブタの小腸から取り出したものは、セクレチンや CCK-PZ と似た作用も持っていることがわかった。セクレチンや CCK-PZ は十二指腸分泌を増加させるので、そこでの水の吸収はむしろ減少させるような出納関係を生ずることになる。

このフラクションの中にある物質は他のホルモン、例えばガストリン、プロラクチン、アンギオテンシンのようにナトリウム吸収を促すようなものとも異なったものであることがわかった。そして、このものは既知の活性ペプチドとは異なるものとしか考えられな

いというので、M. I. Grossman 先生はこれに Sorbin という名をつけたらよいのではないかと言われたそうだ。

消化管の活性ペプチドは最近すさまじい勢いで発見されつつあり、Endocrine, Paracrine, Neurocrine などと作用機序によって分けられているが、ほんとにちょっと文献から目を離している間に、またまた次のものが出てきているといった感じさえする。

モルフィン様ペプチドのエンケファリンも今や薬学、薬理学領域での研究は盛んで、またこのペプチドのレセプターもかなりたくさんあるのだそうであるが、消化器領域でも縦走筋弛緩作用など従来分離して *in vivo* での消化管平滑筋各層の働きについての研究もできるようになってきたようである。 (M)